

「授業設計書」フォーム活用手法の提案 —既存ツールの効果的活用とスタッフのスキル育成を目指して—

Proposal of an Effective Use of an Existing Instructional Design Form
for Staff Development

米山 あかね^{*1,2} 根本 淳子^{*2} 遠藤 孝治^{*1} 久保田 真一郎^{*2} 鈴木 克明^{*2}
Akane YONEYAMA, Junko NEMOTO, Takaharu ENDO, Shinichiro KUBOTA, Katsuaki SUZUKI

^{*1}サイバー大学

^{*1}Cyber University

^{*2}熊本大学大学院 社会文化科学研究科 教授システム学専攻

^{*2}Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

〈あらまし〉サイバー大学では、インストラクショナルデザイナーとアシスタント・インストラクショナルデザイナーが、SME である教員と協働して、「授業設計書」を作成することにより、設計段階での教材の出入口管理や後のコンテンツ開発工程の効率の向上を図っている。本稿では、次の段階のステップアップとして、「授業設計書」フォームの運用において、情報共有とノウハウの蓄積を容易に行うことができるシステムを構築する必要があることを指摘し、アシスタント・インストラクショナルデザイナーの育成を強化するため、「授業設計書」フォームの効果的な活用手法を提案する。

〈キーワード〉 インストラクショナルデザイン, 学習環境, 授業設計, 人材開発, 社会人教育

1. はじめに

サイバー大学は、平成 19 年 4 月に開学した、日本において数少ない完全インターネット制の大学である。授業数は多く、平成 22 年 7 月現在までに 350 科目ほどを開講してきた。

サイバー大学では、インターネットで配信する授業コンテンツの設計・開発を支援し、高等教育の質を担保するため、コンテンツ制作センターという専門部署を設置している。スタッフとしては、インストラクショナルデザイナー（以下、IDer）を「IT 総合学部」、「世界遺産学部」、「教養科目」、「外国語科目」の 4 部門の統括責任者に置き、その下に配置されるアシスタント・インストラクショナルデザイナー（AIDer）が、インストラクショナルデザイン（ID）の手法とプロセスに則り、各々数名の教員に対して教材設計・開発の支援を行っている[1]。第一筆者は、コンテンツ制作センターの AIDer の職務を担うスタッフの一人である。

本研究は、サイバー大学において教材設計の際に使用している「授業設計書」フォームを、スタッフの ID スキル育成強化という観点で、さらに効果的に活用できるシステムを構築することを

目指すものであり、本稿では、そのプロセスを通じた検討結果について報告する。

2. 既存の「授業設計書」フォームの運用方法の課題

「授業設計書」フォームは、教材設計の段階で IDer・AIDer と教員の 3 者が協働して記入することにより、学習目標の明確化や、学習順序の系列化を実現するためのツールである。教材の出入口を設定し、どのように開発していくかを視覚化し、それを 3 者が共有することにより、後の開発工程をスムーズに進めることを可能としている。

遠藤他（2009）では、「授業設計書」フォームが作成される前の「コンテンツ計画書」使用時の問題点と、その問題点を改善するために作成された「授業設計書」フォーム、およびその利点・効果について明らかにしている[1]。また、遠藤他（2010）では、「授業設計書」の評価の観点をリスト化した「授業設計書チェックシート」を導入することにより、教員へのフィードバック内容を平準化する仕組みを構築したことについて述べている[2]。

「授業設計書」フォームは、「授業設計書チェ

ックシート」とともに、コンテンツ制作センターの教材設計・開発工程において、欠かせない有効な支援ツールとなっている。ただし、現時点の運用方法に目を向けると、課題も残されている。

第一に、図1の通り、IDer・担当 AIDer と教員の3名での「授業設計書」の共有は図られているが、他の IDer や AIDer が容易に参照できるような共有は十分になされていない点である。

第二に、設計・開発が完了した時点で、AIDer が設計の振り返りについて外化する機会および記入欄が無く、設計に関するノウハウは各自の暗黙知のままとなっている点である。

「授業設計書チェックシート」により教員へのフィードバックは平準化され、問題点は漏れなく抽出されるが、教員への学習効率・効果・魅力向上のための提案は、IDer や熟練 AIDer であれば可能であっても、新米 AIDer には困難なことが多い。そのような場合、新米 AIDer は IDer や熟練 AIDer の OJT による指導を受けている。また、コンテンツ制作センター内の集合研修も定期的に行われており、新米 AIDer のスキルアップが図られている。しかしながら、新米 AIDer が自発的に学習しやすい環境を構築するために、ひいては、組織全体の教材設計・開発支援の質をさらに向上させるため、「授業設計書」を現状より効果的に活用する方策が必要である。

3. 「授業設計書」フォームを効果的に活用するための試案

上記の「授業設計書」フォームの運用における課題に対する試案として、次を検討した。

(1) 「授業設計書」を IDer および AIDer のスタッフ全体で共有し、必要に応じて誰もが容易に参照できるようにすることにより、AIDer のスキル育成のための教材とする。

(2) 付随的に、「授業設計書」フォームにリフレクションとフィードバックを記入できるスペースを設ける。担当 AIDer が、設計・開発の途中段階と完了後にリフレクションを行い、IDer や熟練 AIDer からフィードバックを受けるようなシステムを構築する。

(1) と (2) を実施することにより (図2)、担当者レベルのみで参照されがちだった「授業設計書」フォームを、ノウハウの蓄積された有効な教材として活用し、AIDer のスキル育成の強化に

つなげることが可能と考えられる。

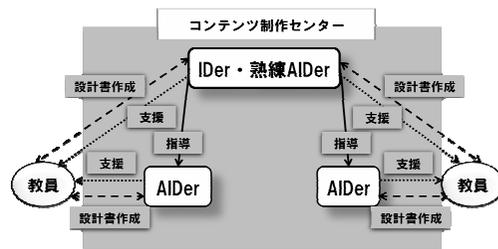


図1. 現状の設計段階の協働作業

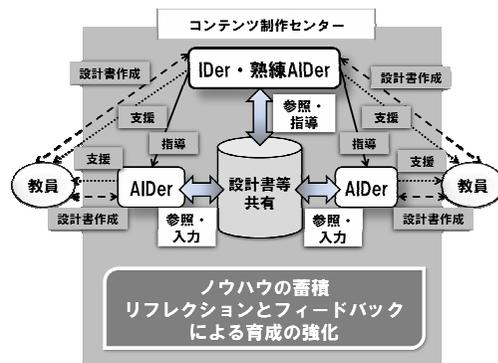


図2. 「授業設計書」共有のイメージ

4. まとめと今後の課題

今後は、リフレクションおよびフィードバック内容を記入するスペースを「授業設計書」に付加し、ラビッドプロトタイピング[3]の手法により、プロトタイプを作成する。また、具体的にどの段階でリフレクションとフィードバックを実施するのが良いかの検討を行う。その後、協力者を募って、プロトタイプ的形成的評価を実施する予定である。

参考文献

- [1] 遠藤孝治, 後藤幸功, 半田純子, 本間千恵子, 小野邦彦, 鈴木克明 (2009) サイバー大学の授業コンテンツ制作に係る「授業設計書」フォームの活用状況. 日本教育工学会 第25回全国大会 講演論文集:499-500
- [2] 遠藤孝治, 後藤幸功 (2010) 授業コンテンツの制作と保守. サイバー大学eラーニング研究 創刊号 (印刷中)
- [3] 鈴木克明 (2004) eラーニングファンダメンタルテキスト